

連載 第2回 福聚山史

篠原 重一 文
及川 一晋 編

常円寺の起立

1、序

御府内寺社備考（幕府官撰の寺社に関する記録集、文化七年より文政十二年にかけて編纂）によると、常円寺は、

下総國 本土寺末

柏木成子町 福聚山常圓寺

境内除地二千七百七十二坪

御年貢地七千二百二十八坪

開闢之儀者天正十三年乙酉年

九月十三日二御座ル

と記されている。また、その文章の後半に、常円寺は以前「幡ヶ谷村」にあった、と次のように簡単に附記されていた。

往古ワ幡ヶ谷村寺地有之

其後当所工替地建立二御座候

その後にある常円寺についての資料を散見するも、同様の記載がされている。この件は、私には大変興味深く感じられたが、それから特に何の手掛かりもないままの状態がしばらく続いた。しかし、後に昭和六年刊行の東京淀橋誌孝なる資料（当時の淀橋町の地誌）を手に取る機会を得た。常円寺の項には前記と同様、次なる文章を見ることがとなった。

又口碑傳ふるところによれば當寺はもと幡ヶ谷村（甲州街道、幡ヶ谷停留所の西、志村米店の地）に在りし……

右記の文章には、元常円寺の場所が具体的に記されていた。

これを手掛かりに何か判るかもしれない、と微かな期待を抱きながら調査を始めた。さらに、もう一つ調査を始めるきっかけがあった。予てより常円寺の歴史について交流があった同寺執事上人より次の言葉を聞いていたからだ。『現在でも幡ヶ谷には多くの檀家がいいて、秋元、志村、長谷川、藤井という姓です。また、幡ヶ谷附近の甲州街道沿いには地藏尊のお堂があり、その内には南無妙法蓮華経とお題目が彫られた石碑がある』と。執事上人のこの言葉が非常に重く感じられ、まずは現地に行かねばと、京王線新宿駅に向かった。

2、幡ヶ谷散策

梅雨の晴れ間をぬって幡ヶ谷行きを決行。戦前は幡ヶ谷駅までは幾つもの停車場があったが、今は新宿駅から二つ目で



幡ヶ谷 子育地蔵尊

ある。今回は一駅先の笹塚駅で下車し、甲州街道を新宿まで徒歩で戻る行程を考えていた。笹塚駅の改札をぬけ、すぐ左側の甲州街道に出て中野通りと交差した南東の角に、偶然地藏堂を発見した。それは渋谷区の家内板によると、牛窪地藏尊だという。正徳元（一七一）年の建

よると、戦前、親の代に志村米店は存在したという。現在の所在地を聞き、その場所を確認することができた。疑問に思ったのは、前述の資料によれば駅の西側であるはずの志村家の位置が東側にある、正反対の場所となることである（疑問は後日解明された）。

しばらく行くと、幡ヶ谷（住所 幡ヶ谷一）のはずれ、甲州街道の歩道橋の前に三階建ての高さほどの塔状の建物を見つけた。地藏尊といわれるごくごく狭い場所であった。数段上がった所に目的物とおぼしきお地藏さまがいらつしやうした。子育地藏尊とある。大きな鍵で扉を閉ざし、堂内は薄暗く内部を拝見することは不可能であった。近所の人にこの地藏尊の世話人の所在を聞き訪問することができた。お堂は狭く、広さ一坪ぐらい。中央には高さ二メートル余りの立像の石仏がある。だが、永年の風雪に晒されていたためであろうか破損が甚だしく、彫文はほとんど解読できなかった。地藏尊と並んでその左に、同じく高い高さのお題目塔が建っていた。正面に、南無妙法蓮華経 平等利益と刻んである。左面には、是歳元禄癸未月 元禄十六（一七〇三）年と建立された年月が刻まれている。その左右には石像が二つずつ合計四つあるが、彫文が解読できたのは古いものから貞享年間（一六八四〜八七）に正徳三（一七一三）年、正徳五（一七一五）年の三つの地藏尊であった。後に、これらの事を検証し、天正十三年以前の常円寺の実態を調査することになる。

（つづく）